

岐阜県支部だより

第7号 平成23年9月30日

- 1-◎巻頭言
- 2-◎20周年特別企画
- 3-“忘れられない あの一言”
- 4-◎研修会報告

巻頭言

教育相談に携わってきて 本当によかった

教育相談学会岐阜支部顧問

長谷川 恭子

久々に岐阜県支部主催の夏季研修会に出席した。島崎講師の「保護者と共にすすめる教育相談～理不尽なクレームへの対応～」という研修内容に惹かれたことは勿論だが、お骨折りいただいている役員の方々や会員の皆様にもお目にかかりたい気持ち強く働いたからだ。

当日、会場に入るや否や懐かしい面々に出会った。そして温かい言葉を掛けていただくと同時に、いろいろな思い出が蘇り胸が熱くなった。

思い起こせば、私が教育相談に関わったのは、昭和61年に教育センターの相談部に専門研修主事として入所したのがきっかけだった。「生徒指導」と「教育相談」と何処が違うのか疑問を持ちつつ、教育相談について本格的に学ばざる得ない羽目になった。開発的・予防的な機能の講座を展開するのは当然だが、「登校拒否の児童生徒への対応」という研究課題で、来談者に個別面接をして治療をしていくことも毎日の業務であった。ロジャーズのカウンセリング理論や技法を必死で勉強したが、なかなか身に付かず苦悩の連続だった。そんな頃はまだ教育相談学会という組織もなく、先輩のご指導と、個人では研修場所を捜し求めて東京や名古屋までよく通ったものだ。臨床心理士研修会にも入れてもらった。そこでは、専門的な鋭い視点で個の内面を見て変容を図っていく事例研究だった。緊張の連続だったがとても力になった。それから今日まで、学校・少年センター・適応教室・幼稚園・電話相談など、各所で教育相談業務に携わって20年余りが経過した。

この年になって、「人間関係の難しさ」「人間とは」「生きるとは」を真剣に考えるようになった

時、長い間教育相談に関わって学ばせてもらったことは本当によかったとつくづく思う。

そして今なお、大切に生かしている教育相談の態度がある。

◆直そうとするな わかろうとせよ

教師は、とかく指導という名の下に子どもに「問い詰めたり説教したり」「指示したり命令したり」しやすいが、「行動の奥には必ず意味がある」ことを忘れない。誰も、自分の気持ちを解ってもらいたいと思っている。

◆聴き上手になる ～十四の心で

事柄でなくその底を流れる感情を聴く～

“自分の思いを伝えたい”“～するといいと教えたい”という気持ちが先立って、子どもの話をよく聴かず一方的に解釈して説教をしない。

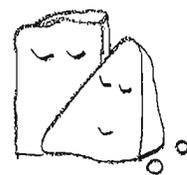
◆自分をよく知る努力をする

自分を好きになることが大切だ。自己に対する信頼感が無くては人生を肯定的に見られないし、子どもからの畏敬の対象にならない。そして子どものよさを認めてやることも出来ない。人のせいではなく、己へ返してみることに。

◆「教えること」より、「育つ・育てること」

人間は誰でも、自分で育つ力を持っている。それには自分でやってみて体感する事が一番だ。例え失敗してもその経験をする間、その子のできる力を信じて支えながら辛抱強く見守ってくれる人がいるとよい。

久しぶりに出席した研修会・・・先生方の大変さを実感して岐路に着いた。



心から あの一言

『どんな好きな先生が来て、半年くらい経つと洗脳されてしまう。』

中学生のAさんが、相談室に来た時に「好きな先生はいないの？」という質問に答えてくれた言葉。私たちが考える先生らしくなることを洗脳と言っていることが、とても印象のこり、どのような教師を目指すのかを考えさせられました。 郷田 賢

『先生！私を追い出そうとしているでしょ！』

T子と関わり始めて描いてきた魚の絵、火山の爆発の絵、転がっていくおにぎりの絵。本人の苦しみを感じ受け入れようとしていた時でしたが、私の心の揺らぎを感じ取っていたかと反省しました。ゆったりした気持ちで寄り添う事の大切さを教えてもらいました。 棚瀬 郁子

『早く席に着きなさい。これから音楽の勉強を始めます。』

小学2年から不登校になったAさんと出会ったのは、4年生の時です。放課後登校が出来るようになったAさんと教室に入ると、Aさんは教壇に立って私に言いました。そして、ピアノを弾く真似をし歌い始めたのです。学校へ来て皆と一緒に勉強した気持ちが、ひしひしと伝わってきました。しかし、自分の席に戻ったAさんは...

『これは、私の机じゃない！』

と言ったのです。机の中には、たくさんのプリントが無造作に押し込まれていました。Aさんの心を折ってしまった・・・忘れられない場面です。 若美屋 ひとみ

『いい天気なんかじゃねえ！』

暴力的なところのある支援学級のA君。「おはよう。いい天気だね。」の声かけにいつも返る言葉です。「あまのじゃく」と思っていたのですが、そこには感覚過敏の辛さがあったことを後になって知りました。 堂前 計枝

『先生、僕の時もボタン届けてくれる？』

高校入試の朝、ある生徒が他校の生徒に制服のボタンを1個取られてしまいました。入試会場で点呼をした私は、中学校へボタンと裁縫道具を取りに行き、受験場へ届けたのです。ある年、学級の生徒にその話をした後、一人の生徒がこう聞いてきました。その生徒は、服装や生活で問題を抱えた生徒でした。“俺のような人間でも先生は面倒を見てくれるか”と言っているように思えました。どの生徒も同じように大切にされる姿勢を教えられた言葉です。 幸脇 弥生

『ころ！』

うずくまって、ゆがんだ顔をした彼女に私はとっさに尋ねたー「からだ？ころ？」ー保たれていた心の均衡はその朝崩れた。崩壊した家庭と笑顔の学校生活。二つの顔と一つの心、シーソーに揺れながらの日々。支点がどこかにあれば、降りなくて済むのだろうが偏る時もある。まだ18歳の高校生、受け止めて欲しかったのは重過ぎる心でした。

篠原 千里

『保健室でいっぱい、いっぱい成長させてもらいました。』

中学校に勤務していた時、卒業をひかえた女子生徒がくれた手紙です。何が彼女の支えになっていたのか、彼女に対する私の姿勢は誠実であったのか考えさせられる言葉でした。子どもが保健室や相談室などで過ごす時間が長くなると、ここにいる意味を考え、時に悩みます。しかし、答えは子ども自身が出していくものなのだ改めて感じました。 佐々木 文枝

『〇先生はハサミ・・・□先生はのり・・・永田先生はねクッションか箱！』

身近な教師を文房具に喩えていたBさん。私の役目がクッションや箱ならば、必要な時にしっかりと気持ちや存在を受け止め、旅立ちたいと思った時に送り出せるようにしたいと思いました。

永田 智子

『はい』

不登校が続くAさんの電話の中の返事。3年生が始まった頃の「はい」は、小さな寂しい声・・・教室へ戻る意欲が出てきた頃の「はい」は、少し元気が出てきた声。そして相談室登校を始めた頃の「はい」は、明るい前向きな声。次はどんな「はい」が聞こえるか楽しみです。Aさんのたくさんの思いが込められている「はい」の2文字・・・大切に心を傾けたいと思います。 小笠原 淳

『これからも、希望という言葉を忘れず頑張りたい。』

小・中を通じて教室では殆ど声を出すことはなく、相談室と別室登校だった子。卒業して行く時にくれたメッセージに、内面に育った力強さを感じることができました。 神谷 文子

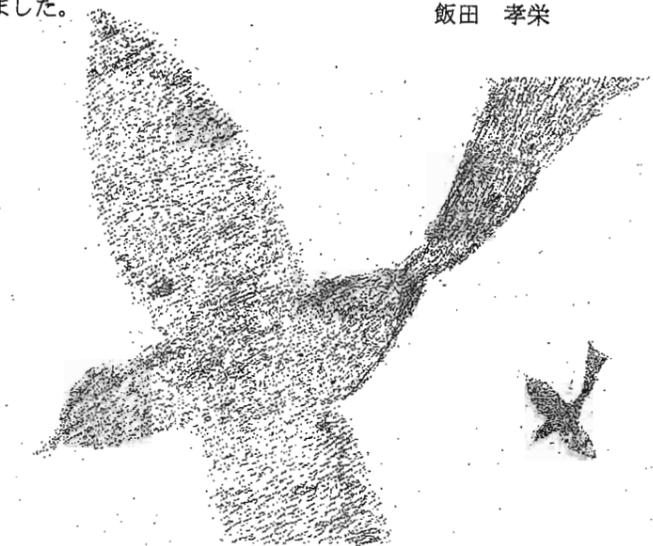
『最近、母は完璧になってきた。』

中学校でおりこうだったA子は、高校生になって母親に反発するようになりました。そんなA子に対して母親は、腫れ物に触るような態度でA子の機嫌をとると言います。その様子について表現したA子の言葉でした。 田中 智保美



『先生が、私のモヤモヤを消してくれる消しゴムのような先生であつたら嬉しい。』

人と会えなくなったAさんに宛てた、30通の一方的なミニ手紙。4ヵ月後にやっと届いたAさんからの一言。苦悩と希望が見え隠れ・・・登校への動き出しが始まりました。 飯田 孝栄



子どもたちとの出会いの中で、今もなお心に残っている言葉はありませんか？
先生方から寄せていただいたその文面を何度も読み返す中で、



子どもたちの言葉の重さを感じるとともに、先生方から「と、凄く大切なものをお預かりしたような気持ちになりました。寄り添おうとする深い「心」を感じたのだと思います。」

研修会報告

20周年記念講演、並びに 記念シンポジウム（含定期総会）

日本教育相談学会は、今年度で20周年を迎えます。そこで今年は、定期総会の後に記念事業として、記念講演、記念シンポジウムを開催しました。いつもより多くの方の参加があり、教育相談への関心と意欲が感じられました。

1. 日時：平成23年6月18日（土）
14:00～16:00
2. 会場：岐阜女子大学（岐阜市太郎丸80）
3. 内容：①定期総会
②20周年記念講演
演題：「教育相談の草創期を語る」
講師：秋山 健 先生
③20周年記念シンポジウム
テーマ：「これからの教育相談を考える」
司会：飯田孝栄
シンポジスト：小森芳順、下野正代
山田日吉、草野 剛

記念講演では、秋山先生からこれまでの教育相談の歩みを語っていただく中で、教育相談の心に触れていただきました。

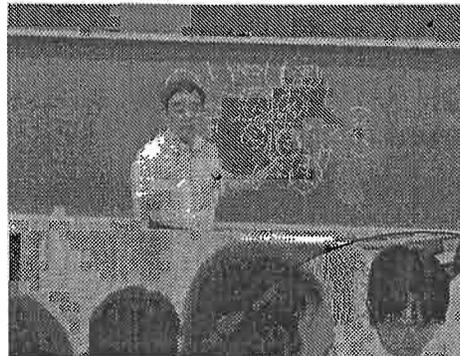
シンポジウムでは、これからの教育相談として、特に「チーム支援」を中心に、シンポジストの先生方から提案していただきました。参加された先生方からは、養護教諭の立場から「チーム支援の中で養教は何を求められるか」、担任の立場から「先生同士が子どものことをもっと語り合いたい」、スクールカウンセラーの立場から「チームの一員として努力していること」、などについての意見が出されました。時間の関係で、交流とまではいきませんでした。チーム支援の必要性や、それを支える人のつながり、そして情報のつながりなど課題も含めて、いろいろな立場の先生方とこれからの教育相談を考える時間が共有できました。次回のシンポジウムは、若い先生方からの提案をいただく予定ですので是非ご参加下さい。

20周年記念事業夏季研修会

記念研修会には学校の教員、相談機関の相談員、大学関係者など約100名の参加がありました。

1. 日時：平成23年8月20日（土）
9:30～16:15
2. 会場：岐阜聖徳学園大学（柳津町高桑西1-1）
3. 内容：演題：「保護者と共にすすめる教育相談」
講師：嶋崎 政男 先生
東京都立川市立立川第一中学校校長
日本教育相談学会事務局長

保護者のクレーム対応を中心に、クイズや演習を交えながら進められました。保護者と教員の相互理解のため、保護者との会話で自分を知ってもら



らう（自己開示）、また自分の気づかない部分

を保護者から教えてもらう姿勢も大切であることをはじめ、

「心理的事実」と「客観的事実」を見極めそれぞれの事実についての適切な対応が求められること等が話されました。参加者からは、「具体的な事例が多く話がわかりやすかった。」「今日的な内容かつ、参加型の研修会で良かった。」等の感想があり、先生の関わった事例の重さに緊張しながらも、ユーモアあふれる語りになごむ研修でした。

（文責：広報委員 佐々木 文枝）

日本学校教育相談学会岐阜県支部会報第7号

2011年（平成23年）9月30日発行

発行：日本学校教育相談学会岐阜県支部

編集：日本学校教育相談学会岐阜県支部広報委員会

ホームページ <http://www1.ocn.ne.jp/~sodangif/>